

「西京邑田畑惣絵図」からみた近世西京村の特性

渡 邊 秀 一

1. はじめに

本稿の目的は、京都府立総合資料館に所蔵されている「西京邑田畑惣絵図」の分析をとおして、近世京都近郊に位置した山城国葛野郡西京村の地域的特色を考察することである。現今の歴史地理学における近世村落研究は決して活発とは言えない。しかし、1970年代まで地図史的考察の対象でしかなかった村絵図や、部分的な記事の利用に留まっていた近世地誌を積極的に研究資料として利用するようになり、景観復原的研究だけでなく、空間認識論的な研究や近世村落の歴史地誌の研究へと展開している¹⁾。その背景には歴史地理学における絵図研究が進展するなかで認識論的アプローチの必要性が強く意識されたこと²⁾や、プリンス (Hugh Prince) による歴史地理学研

1) 村絵図を利用した近世村落に関わる研究には五十嵐勉などによる一連の成果がある。

五十嵐勉 (1985)「近世村絵図にみる空間表現の歴史的变化―播磨国「真広村絵図」の通時的分析―」, 歴史地理学紀要 27, pp.85-108. 同 (1989)「村絵図にみる近世村落の生活世界―播磨国赤穂郡「上村絵図」をテキストとして―」(葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 下巻』, 地人書房, 所収), pp.167-183. 同 (1990)「佐賀藩における藩製郷村絵図に関する一考察―肥前国神埼郡を事例に―」, 立命館地理学 2, pp.23-36. 三木理史 (2001)「大和国平群郡音乙田村絵図の研究」, 奈良大学総合研究所報 9, pp.25-38.

また、近世地誌を資料とする研究は尾張を対象とした梶川勇作の一連の成果のほか、溝口常俊による研究成果を挙げることができる。1985年以降の成果として、以下のようなものがある。梶川勇作 (1988)「尾張地方の近世の新田村」, 金沢大学文学部地理学報告 4, pp.13-27. 梶川勇作 (1989)「尾張知多郡の近世村の土地条件」, 金沢大学文学部論集 (史学科篇) 9, pp.A1-A41. 溝口常俊 (2000)「隠岐の地誌『増補隠州記』(1688)の分析」, 名古屋大学文学部研究論集 (史学) 46, pp.39-66. 梶川勇作・溝口常俊 (2001)「名古屋周辺における近世村の歴史地理」, 金沢大学文学部論集 (史学・考古学・地理学篇) 21, pp.1-40. 溝口常俊 (2009)「近世地誌書の分析」情報処理学会研究報告・人文科学とコンピュータ研究会報告 2009-CH-83 (18), pp.1-8. 溝口常俊 (2006)「GISによる地誌分析―近世隠岐を事例として」, 名古屋大学情報連携基盤センターニュース 5-3, pp.223-230.

2) 絵図に対する認識論的アプローチについて説明したものには、以下のものがある。

小川都弘・小林致広・久武哲也 (1988)「絵図分析の枠組」(葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 上巻』, 地人書房, 所収), pp.11-47. 応地利明 (1996)『絵地図の世界像』(岩波新書 480), 岩波書店, pp.1-9.

究の動向に関する整理と展望³⁾に拠りつつ、伝統的な景観復原的研究から脱却しようとする研究の流れがある⁴⁾。都市と村落という研究対象の違いはあるが、筆者もこれまで近世絵図を用いた歴史地理学研究を進めてきた⁵⁾。それらはプリンスの展望論文に準拠して言えば「Existence world」の研究⁶⁾であり、本稿もそれらと分析視角を共有している。

菊地俊夫は「風景はそれぞれの場所の自然的環境、社会・経済環境、歴史・文化環境を総合的に地表に投影したもの」と言って地図を風景の図的表現として位置づけ、さらに「風景がつくられた自然環境や社会・経済環境、および歴史・文化環境などの背景を読み解くこと」の重要性を説いた⁷⁾。絵図もまた地図であり、菊地の言は近現代の地形図だけを意識したものではない。しかし、町方・在方で作成され、伝存してきた絵図を資料とするとき、それらには近現代の地形図にはない特性がいくつかあることに注意しておかなければならない⁸⁾。特に筆者が強く意識している点は、絵図の記載情報の時間的重層性である。江戸時代の町方・在方では様々な機会に絵図が作成されているが、領主等へ提出する公的性格をもつ絵図を別にすれば、既存の絵図にその時々に必要なとした情報を書き加え、使用し続けた絵図が少なくない。そのため、一

3) Hugh Prince (1971) 「Three realms of historical geography」, Progress in Geography 3, Edward Arnold, pp4-86.

4) 伝統的な景観復原あるいは発生論的研究からの脱却を目指そうとする姿勢は、とくに以下の文献に顕著にみられる。有蘭正一郎ほか編 (2001) 『歴史地理調査ハンドブック』, 古今書院, pp1-16. 本書の構成および「第1章 歴史地理学の方法と課題」はプリンス (1971) の展望論文に拠るところが大きい。『歴史地理調査ハンドブック』以降に刊行されたテキストのなかに見られる歴史地理学の方法論的記述も同じ指向をもっている。

5) 例えば、渡邊秀一 (2003) 「光悦古図と鷹峯光悦町の景観」, 鷹陵史学 29, pp215-232.

同 (2011) 「江戸中期の越前大野における浮地と渡り地―「渡り地浮地御絵図」の理解にむけて―」, 佛教大学歴史学部論集 1, pp33-49. 同 (2012) 「越前大野城下における土地管理と景観―「渡り地浮地絵図」の考察から―」, 佛教大学歴史学部論集 2, pp65-85.

6) 現在の日本の歴史地理学においてはプリンスの展望論文 (前掲3)) に基づきながら研究領域を実在的世界 (Real worlds あるいは External world) ・主体的世界 (Imagined worlds) ・抽象的世界 (Abstract worlds) の三つに分けて記述することが多い (前掲4))。しかし、筆者が用いた「Existence world」はこの三領域における Real worlds (実在的世界) とは異なっている。確かに Real worlds を実在的世界と表現することは可能であろうが、プリンスはこれらとは別に抽象的世界を non-Existence world とも言っている。プリンス自身は「Existence world」という語は用いていないが、non-Existence world に対して Real worlds あるいは External world, そして Imagined worlds を合わせた領域として Existence world を構想したことが推定される。筆者が言う Existence world とは、この Real worlds と Imagined worlds を一体的にとらえようとする考え方である。

7) 菊地俊夫編著 (2004) 『風景の世界―風景の見方・読み方・考え方―』, 二宮書店, pp3.

8) 一般的には作図のルールが公開されていないこと、図の上下・左右に決まった方位がないことが、近現代の地形図とは異なる特性として指摘されている。

舗の絵図中に時間の異なる情報が同時に存在するということが起きている⁹⁾。本稿が取り上げる「西京邑田畑惣絵図」について言えば、これまで研究資料として検討されたことはない。したがって、以下では「西京邑田畑惣絵図」の個々の情報の記載時期を検討することによって当該絵図の時間的重層性を明らかにしていく。また、それはそれぞれの情報が記載された政治的背景、あるいは社会的・経済的背景を読み解いていく過程に他ならず、最終的には当該絵図の作成・利用目的を明らかにすることになるであろう。

「西京邑田畑惣絵図」の分析を通して西京村の政治的、社会的、経済的な環境について考えるとき留意すべき点は、西京村の地理的位置に起因する特性である。西京村は近世京都市街の西に隣接した近郊村落で、御土居内外に位置する「お土居組十二ヵ村」あるいは「お土居廻り十二ヵ村」と称される諸村の内の一ヵ村である¹⁰⁾。「お土居廻り十二ヵ村」は愛宕郡・葛野郡・紀伊郡にまたがり、この三郡の支配については門跡・公家・寺社領が50～80%を占め、一村当たりの領主数も多い相給村であり¹¹⁾、また蔬菜生産が盛んな地域に位置していたことが既に指摘されている¹²⁾。しかし、近世京都市街に隣接する村落に関する個別具体的な研究は三条台村や東塩小路村など少数にとどまり¹³⁾、未だ不明な点が多い。このうち、三条台村は西京村と隣り合っている点で注目されるが、三条台村が成立した特殊事情を鑑みれば、その結果を西京村に適用することはできない。したがって、近世京都近郊村落であること、そして門跡・公家・寺社領からなる相給村であるという点が「西京邑田畑惣絵図」の中にどのように表現されているのかという点も考慮に入れて検討を進めることになる。

9) 例えば、前掲5)、渡邊(2003)を参照。

10) 京都市(1962)『京都の歴史5 近世の展開』, 学芸書林, pp590-593.

11) 前掲9), pp302-305.

12) 前掲10), pp588-601.

13) 岡井毅芳(1972)「三条台村の土地形態について」, 京都市史編さん通信No.33, pp1-3.

伊藤裕久(1988)「洛中農村の居住形態に関する復原的考察—下山城京廻東塩小路村における「構」集落の空間構造—」, 日本建築学会計画系論文報告集387, pp126-134.

2. 「西京邑田畑惣絵図」の記載情報

伝存する「西京邑田畑惣絵図」（以下、田畑惣絵図と略称する）は表装し直され、横 20cm×縦 27.5cmの大きさに折りたたまれている。表紙中央には「安政二改 西京邑田畑惣絵図」と書かれた題箋が貼り付けられ、その左下に「菅氏所蔵」と書かれた箋紙が貼られている。菅氏とは西京村で村役人を務めてきた家である。これを広げた絵図の大きさは横 162cm×縦 151cmで、内題や年紀・提出先、さらに裏書などは記載されていない（図1）。一部に彩色があるが、道路や耕作地の区画を描く線はフリーハンドの墨の細線で、その粗さから清書図やその控図とは思われず、別に存在していた原図をある時期に書写し、利用したものと思われる。この絵図を菅氏が作成したものかどうかは判然としないが、多様な情報の書き込みがあることから、村役人として

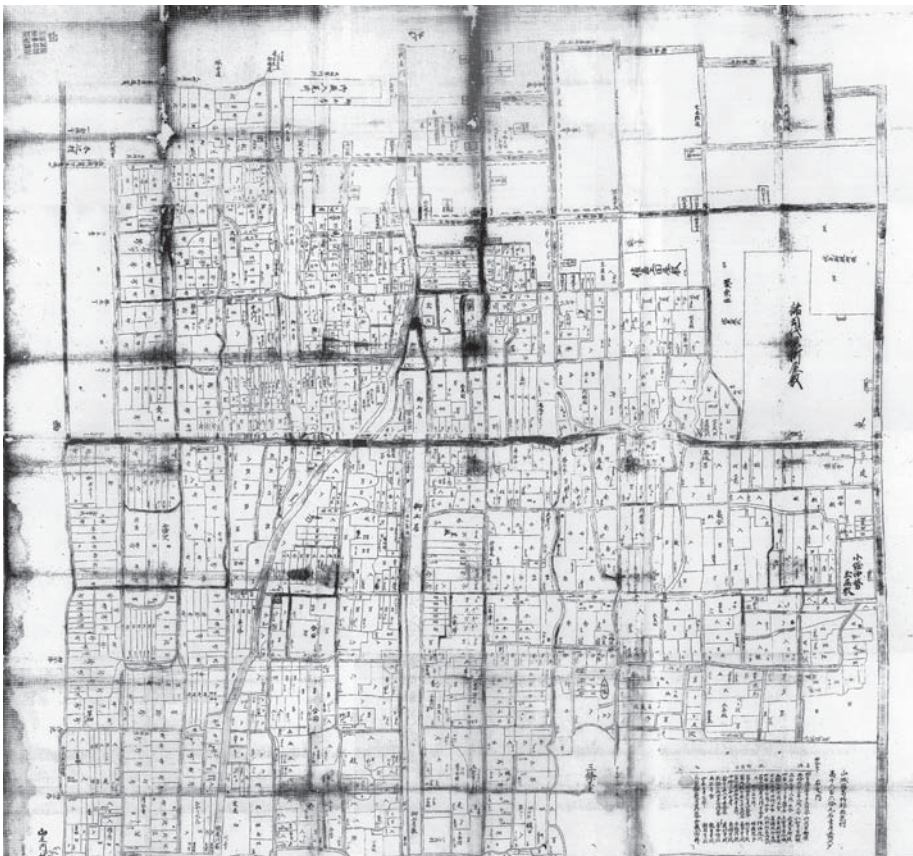


図1 「西京邑田畑惣絵図」（複写）

の業務に利用していたものであろう。また、現在の京都府立総合資料館の収蔵資料の中にこの絵図と関わる西京村関係の文書は確認できず、この絵図が京都府立総合資料館に単体で収蔵された経緯については不明である。

絵図は描写対象や製作方法などを指標として様々に分類されている¹⁴⁾が、記載された情報の性格という点からいえば、基本的には二つのカテゴリーに大別できる。その一つは描写の対象として切り取られた地域と周辺地域との位置関係を示し、また切り取られた地域内部における位置関係を示すための情報である。それらは地名や具体的な地物によって示されることが多い。これらを仮に「地域基本情報」と呼んでおく。他の一つは、絵図の作成目的を完遂するために記載されたもので、「主題情報」ということができる。もちろん、地域基本情報の一部が主題情報の役割を担う場合も少なくない。いずれにしても地域基本情報は主題情報に対してその地理的位置を示す座標の役割を果たし、絵図が地図として機能するために不可欠の情報である。

田畑惣絵図では、地域基本情報と主題情報の区別が明瞭である。当該絵図の右下部分には西京村の村高に続いて同村内に支配地をもつ幕府以下 17 領主（妙蔵院を含めれば、18 領主）の支配高が列挙され、その上に領主符号が記載されている。一部に記載されていない区画があるものの、絵図全体に記入されているのはこの領主符号であり、領主符号が当該絵図の作成目的に深く関係していることは明らかである（図 1）。そして、これらは各領主の西京村における支配高と支配地の分布状況を把握するためのものである。

田畑惣絵図の記載情報を整理した表 1 ではこれらを主題情報 1 としたが、当該絵図にはもう一つの主題情報がある。それは区画ごとに記載された名請人名である（表 1、主題情報 2）。名請人の記載には墨書と朱書の二種類がある。墨書された名請人名の数は朱書されたものに比べれば少なく、一部は朱筆の線や丸囲いによって抹消され、傍らに朱筆の名請人名が記載されたものも見られる。このことから、主題情報 2 は墨書が先行し、朱書はその修正および名請人名の新規追加であったことがわかる。

当該絵図の地域基本情報も墨書と朱書に分けられる。表 1 では墨書の地域基本情報を一括したが、内容的には西京村と周辺地域との位置関係を示すものと、西京村内に

14) 近世絵図の分類については、以下を参照。山下和正（1996）『江戸時代 古地図をめぐる』、NTT 出版。同（1998）『地図で読む江戸時代』、柏書房。なお山下（1998）では、描写対象・印書技法・製本形式等の幾つかの分類指標を組み合わせた分類し案を提示している（pp24-25.）また、近年の文献には以下のものがある。杉本史子・磯永和貴・小野田淳ほか編（2011）『絵図学入門』、東京大学出版会。この文献の 2 章では、山下（1996, 1998）とは異なり、絵図の種類を製作あるいは利用の目的で分けている。

表1 「西京村田畑惣絵図」の記載情報

カテゴリー	要素	情報内容	記載区別	備考
主題情報1	文字	所領構成	墨書	
		領主記号	墨書	
主題情報2 (追加・修正)	文字	名請人名	墨書	
			朱書	新規に朱筆で追加したもの、朱書の抹消線・丸印により墨書された名請人名を修正したものがある。
地域基本情報	文字	隣接村落名	墨書	
		字地名	墨書	一部は一区画単位で記載。
		道路名	墨書	
		武家屋敷名	墨書	
		寺社名	墨書	
		地目	墨書	周辺村落耕作地の地目
		地目	墨書	西京村北町西部耕作地
		耕作地面積	墨書	西京村北町西部耕作地
	図形	寺社建物	墨書	
		寺社建物	朱書	
		寺社区画線	朱書	
		耕地区画線	墨書	西京村北町西部耕作地
		道路	墨書	彩色 黄土色
		河川・水路・池沼	墨書	彩色 薄茶色、一部青色
		西京村家屋	墨書	灰色に彩色した屋根型
		武家屋敷	墨書	門を絵画的に描写
		御土居	墨書	

おける位置関係を示すものがある。前者は、「三条台村・山之内村・木辻村・聚楽廻・大將軍領」等の周辺村落の情報である。このうち、山之内村の集落は屋根型の記号で西京村の村域近くに描かれている。また、道路名や「所司代組新屋敷」・「小堀中務出屋敷」・「信劬上田屋敷」などの武家屋敷、木辻村の成願寺・念仏寺など周辺諸村の寺院も同様の役割を果たしている。とくに下立売通六軒町西入（長門町）の弘誓寺や下立売通七本松の交差点に立地する浄円寺・教善寺・妙堯寺などは下立売通、七本松通をとおしての位置関係、両道路に対する意識の強さをよく表している。これに対して、切り取られた地域内部における位置関係を示すための情報が字的地名や御土居・紙屋川・池沼・耕作地の区画、そして屋根型の記号で記載された西京村家屋群、北野天神御旅所などの寺社や数か所に記載された祠堂などである。図形要素の中で彩色されているのは西京村家屋・道路および河川・水路・池沼である。ただし、河川・水路・池

沼の色は一部が青色、そのほか大部分が薄茶色になっている。

また当該絵図には、墨書ではあるが、明らかに追加されたものと判断できる情報がある。その一つは旧二ノ保社跡地と思われる場所に記載された耕作地の地目・品等・面積である（図2）。区画ごとに耕作地の詳細な情報が記載されているのは絵図のなかでこの一か所だけであり、その筆跡は周辺村落の村名や領主別支配高の一覧などとは明らかに異なっている。二つ目は一区画ごとに連続して記載された「三条坊門」「ヒノ口」という字的地名で、他の字的地名とは記載の仕方が異なっている。朱書は「東光寺」の墨書の横に記載された建物一字とその南側に引かれた区画線一本、村域西部の建物一字である（図2）。主題情報における朱書の使い方から考えれば、地域基本情報におけるこれらの朱書も追記された情報と考えられる。

3. 地域基本情報の記載時期

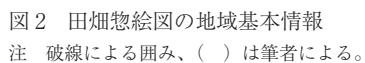
地域基本情報の記載時期に関わる手がかりは、三つである。第一は図題にあった「安政二改」の記述である。「改」とは絵図の記載情報の修正を意味するものと理解される。修正された情報が何であったのかという点は改めて検討するが、一般的な理解からいえば主題情報の修正であり、決して地域基本情報の修正を意識したものではない。また、「改」とは当該絵図が新規に作成され、あるいは新規に書写されたものではないことも示している。仮に安政2年（1855）に何らかの必要から新規に絵図を準備したとすれば、伝存絵図の「小堀中務出屋敷」はその時点における京都代官に書き改められ、「小堀勝之助出屋敷」と記載するのが自然なことである¹⁵⁾。第二の手がかりは絵図の右辺を南北に走る千本通の西側に記載されたこの「小堀中務出屋敷」という記載である。小堀中務は享和3年（1803）に京都代官に就任し、文政5年（1822）に京都代官職を小堀主税に譲っている¹⁶⁾。この点から言えば当該絵図の地域基本情報の記載は享和3年から文政5年までの20年の間ということになる（図2）。

三つ目の手がかりは田畑惣絵図に記載された寺社である。当該絵図における寺社は、①区画線の中に寺社名を記載するもの、②建物記号に寺社名を記載したもの、③寺社名のみが記載されているもの、④寺社名の記載がなく、建物記号のみのものという四つの形式で記載されている。数の上では①の形式が18寺社と最も多く、②が念仏寺・

15) 京都市（1973）『京都の歴史6 伝統の定着』，学芸書林，pp.92-93.

16) 前掲13)，pp.92-93.





北野天満宮御旅所の2寺社、③が西王寺・西蓮寺の2か寺、④が5か所である。このような様々な表現形式がとられた理由は不明であるが、最も丁寧な図的に表現されているものが、北野天満宮御旅所である。西京村における御旅所の意味を示唆する表現として注目される。また、当該絵図には東光寺の記載があり、傍らには朱筆で建物記号が記載されている区画があるが、東光寺は西京村の寺院ではないため、ここには含んでいない。これらを合わせると、西京村内の寺社・祠堂は27か所で、寺院19、神社3、そして無名の祠堂5である¹⁷⁾。

西京村にあった寺社の中で、地域基本情報の記載年代を検討する手がかりになるものは、二ノ保社・殊尊院・見性庵の3寺社である。『京都坊目誌』によると、堀川町北側西部の紙屋川東岸にあった二ノ保社は文政9年(1826)に祠堂が取り払われて祭神は北野神社に合祀され、殊尊院は文政13年(1830)に行衛町に再興された寺院である。一方、堀川町西南部地尻の見性庵は万治元年(1658)の開基であったが、その後には衰退し、天保年中(1830～1844)に再興された¹⁸⁾。この3寺社の内で「西京邑田畑惣絵図」に記載されているのは行衛町東側の殊尊院だけである。二ノ保社があったという堀川町北側西部の紙屋川東岸に祠堂はなく、そこに記載されているものは「川端道筋」・「藪」そして3区画の畑地である。『京都坊目誌』では旧二ノ保社地の面積を1反5畝28歩としている¹⁹⁾。これに対して、絵図中の畑地面積の合計は1反1畝27歩で、両者には4畝ほどの差があるが、周囲の藪地を加えれば、この畑地が二ノ保社の旧地であった可能性が高い。また、『京都坊目誌』が見性庵の境内地とした堀川町西南部地尻には、「東光寺」の墨書と朱筆の建物記号・区画線(表1、追加情報)が記載されている。当該絵図における墨書と朱筆の使い分けから考えれば、文字と図形とが同時に記載されたものとは思われず、見性庵かと思わせる朱書された建物は後年の加筆である。東光寺は『京都坊目誌』によれば東堅町西側に位置する臨済宗の寺院で、一方の見性庵は浄土宗寺院であり、東光寺と見性庵の直接的な関係は認めがたい。以上の結果、田畑惣絵図には二ノ保社・見性庵の記載がなく、殊尊院が記載されるだけであること、また文政13年に天保と改元されていることを考慮し、『京都坊目誌』の記述に従えば、当該絵図の地域基本情報は見性庵再興前までの天保年間の様子を示していると言えよう。

17) 田畑惣絵図には麗衣堂・東陽軒のように、現在では資料的に確認できない寺院もみられる。

18) 碓井小三郎編『京都坊目誌 上巻之十 上京第十学区の部』(新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書 第18巻』、臨川書店、所収)、pp291-339。

19) 前掲18)、pp301。

『京都坊目誌』は町単位で町の成立時期や町内に存在する、あるいは存在した寺社、史跡等とその後の変化を記述している。その中には、現在では他に記録が見いだせない記述もある。その意味で『京都坊目誌』は貴重な資料である。しかし、同書の記述にはその根拠が明示されていないことが多い。二ノ保社・殊尊院・見性庵に関する記述も根拠となった資料は不明である。ただ、西京村の庄屋・年寄が署名し、建仁寺役人中に宛てて作成した天保3年8月「山城国葛野郡之内西京村御高帳」²⁰⁾(1832)を見ると、北野天神御旅所・文子天神・老松社・地藏堂屋敷の反別が一つ一つ記載されているのに対して、二ノ保社については何一つ記載されていない。このことは既に二ノ保社が村内に存在しなかったことを示すものであり、少なくともこの部分については『京都坊目誌』の記述に信を置くことができよう。それゆえ、田畑惣絵図の地域基本情報は基本的には享和3年から文政5年の間のある年の景観をベースにして描かれたもので、天保年間以降の変化を反映して地域基本情報の修正・追加が行われたと考えて大過ない。情報の修正・追加の時期については見性庵の再興までと考えるべきであるが、現時点では見性庵の再興時期を特定することは困難である。

4. 領主別支配高・領主符号の記載時期

西京村は幕府以下17領主(妙藏院を含めれば、18領主)の支配を受けた相給村である。表2は田畑惣絵図に記載されたそれら領主ごとの支配高と、天保3年(1832)・慶応元年(1865)の支配高を一覧にまとめたものである。なお、参考として享保14年(1719)の支配高も合わせて示している。表2に示したように、田畑惣絵図では西京村の村高を1669.1506石と記載している。これは天保3年(1832)「山城国葛野郡之内西京村御高帳」や天保郷帳²¹⁾、そして慶応元年(1864)「村高書付并断書」²²⁾に記載された村高と一致している。しかし、当該絵図の領主別支配高を合わせると1668.4816石で、村高から0.669石の不足が生じている。また、領主別にみると、仁和寺宮領が0.089石多く記載され、相国寺領、五条家領、伏見宮領が逆に少なくなっている。ただ、表2によると享保14年と慶応元年の村高に0.284石の差があり、そ

20) 天保3年8月「山城国葛野郡之内西京村御高帳」(京都市歴史資料館所蔵、西村善雄家文書マイクロフィルム紙焼資料)

21) 国立公文書館所蔵『(天保)山城国郷帳』、国立公文書館デジタルアーカイブ。

22) 「慶応元丑年七月 村高書付并断書」(京都市歴史資料館所蔵、西京村文書マイクロフィルム紙焼資料)

表2 西京村の所領構成

	天保3年 (1832)	安政2年改 (1855)	慶応元年 (1865)	参考 享保14年 (1719)	備 考
	石	石	石	石	
幕府領	353.9450	353.9450	353.9450	353.8190	
曼殊院宮領	422.1980	422.1980	422.1980	422.1980	
松梅院領	105.2916	105.2916	105.2916	105.1340	
内, 妙蔵院領	—	11.0700	—	—	
北野御供領	4.5740	4.5740	4.5740	4.5746	
観音寺領	5.0010	5.0010	5.0010	5.0010	北野観音寺
龍安寺領	197.7940	197.7940	197.7940	197.7940	
妙心寺領	192.7460	192.7460	192.7460	192.7460	
等持院領	174.9300	174.9300	174.9300	174.9300	
仁和寺宮領	59.3000	59.3890	59.3000	59.3000	
南禅寺領	43.7000	43.7000	43.7000	43.7000	
千本養命坊領	27.4730	27.4730	27.4730	27.4730	千本釈迦堂
建仁寺領	11.6540	11.6540	11.6540	11.6540	
大聖寺宮領	4.6110	4.6110	4.6110	4.6100	
相国寺領	5.1200	4.3700	5.1200	5.1200	
五条家領	53.0790	53.0750	53.0790	53.0790	
伏見宮領	5.3890	5.3850	5.3890	5.3890	
広橋家領	2.3450	2.3450	2.3450	2.3450	
合計	1669.1506	1669.1506 1668.4816	1669.1506	1668.8666	

資料

山口(泰)家文書「山城国高八郡村名帳」(京都市(1985)『史料 京都の歴史9 中京区』,平凡社, pp456-457.

安政2年「西京邑田畑惣絵図」(京都府立総合資料館所蔵)

慶応元年7月「村高書付并断書」(京都市歴史資料館所蔵,西京村文書マイクロフィルム紙焼資料)

注1)「安政2年改」の合計のうち,上段は絵図に記載された村高。下段は領主別領地高を合計した数値。

注2)慶応元年の幕府領は「松平肥後守様 御役知」と記載されている。

れは幕府領・松梅院領の増加分に等しい。田畑惣絵図の村高にこの支配高の変動が反映されていなかったことを考え合わせると,享保14年以降においては幕府領・松梅院領以外の支配高は公的には変化がなかったと考えなければならない。このことは主題情報①のなかで領主別支配高が主要な記載情報ではないことを意味している。地図(絵図)が文書に対してもつ最も特徴的な機能は特定の事象あるいは地物の座標上の位置,そして他の事象・地物との相対的な位置関係を示すことである。この点からも領主別の支配地分布が主題情報①における中心的情報であると言わなければならない。

い。したがって、以下の検討課題は領主符号の記載時期である。

表3は嘉永6年(1853)「御室御領分田畑帳」²³⁾(以下、田畑帳)に記載された内容を字的地名ごとにまとめたものである。田畑帳には50件の記載があり、それぞれに耕作地の所在を示す字的地名(ただし、一部欠如)・品等・地目・面積・名請人と生産高・取米高・斗代などを記しているが、表3では取米高・斗代を省略した。また、字的地名のうち、馬畠・常ヶ花・堂之うしろ・西ノ町・久ろ田の絵図中における位置は確認できていない。生産高の合計は60石3斗1升1合で、田畑惣絵図に記載されている石高よりも1石ほど高くなっている。

田畑惣絵図によると、仁和寺領を示す符号「御」または「御室」の記載数は38か所で、田畑帳の記載件数よりも少ない。同じ嘉永6年の「養命坊御料水帳」²⁴⁾(以下、養命坊水帳)を見ると、養命坊水帳の記載件数36件に対して田畑惣絵図における領主符号は24である。田畑惣絵図には領主符号の記載がない区画もあるため、その中に仁和寺領や養命坊(大報恩寺領)領が含まれている可能性は否定できない。また、表3のNo.6、No.8、No.29、No.33のような狭小な耕作地まで絵図中に区画が記載されたかどうか疑問である。一例をあげると、表3のNo.33にはほかに比べて詳細な位置情報があり、その位置をほぼ把握できる。二条通を御土居から東へ4つ目にある耕地を絵図中でみると二条通りの南側に東西に長い狭小な区画がある。この区画には領主符号は記載されていないが、No.33の区画である可能性が高い。また、No.6・8がある内野田をみると、狭小な区画が一つあるものの、面積の上でNo.33を下回る、あるいはほぼ等しいNo.6に相当する区画は見当たらない(図3)。このように、絵図における区画と帳簿類における記載件数は対応しておらず、領主符号の未記載、狭小耕作地の区画線省略などにより仁和寺領・養命坊領の領主符号が田畑帳等の記録件数を下回るようになったものと考えられる。

表3を見ると仁和寺領は分散的ではあるが、内野田・二条浦付近に集中する傾向がある。表3によれば内野田に15件、面積にして1町4反2畝22歩で、仁和寺領の31%に相当している。また石高からいえば18,248石で、60,311石に対して30.3%に当たる。また、二条浦の支配地について言えば、記載件数は7件であるが、1件当たりの面積が大きく、その合計1町1反22歩は全体の25%を占め、石高の点でも

23) 「嘉永 六丑年 御室御所領分田畑帳」(京都市歴史資料館所蔵、西京村文書マイクロフィルム紙焼資料)

24) 「嘉永六年丑十一月 養命坊御料水帳」(京都市歴史資料館所蔵、西京村文書マイクロフィルム紙焼資料)

表3 仁和寺領の構成（嘉永6年）

	字的地名	名請人	品等	地目	面積		分米	備考
					畝	歩	石	
1	内野田	庄兵衛	上	田	4	20	0.800	
2	内の田	庄兵衛	中	田	26	21	3.380	
3	内野田	庄兵衛	中	田	25	0	3.248	
4	内野田	庄兵衛	中	田	10	4	1.316	
5	内野田	庄兵衛	中	田	17	6	2.273	
6	内野田	庄兵衛	中	田	0	7	0.030	
7	内野田	庄兵衛	中	田	10	20	1.788	松之浦共
8	内野田	庄兵衛	下	田	0	20	0.073	
9	内野田	庄兵衛	下	田	4	0	0.440	馬場前嵯峨道之上共
10	内野田	庄兵衛	下	田	8	12	0.922	
11	内野田	庄兵衛	下	田	13	12	1.482	
12	内野田	庄兵衛	下	田	4	2	0.239	
13	内野田	庄兵衛	上	畑	10	16	1.580	
14	内野田	庄兵衛	下	畑	2	0	0.220	田成
15	内野田	新左衛門	下	田	4	2	0.457	
16	馬島	西院村・清八	下	田	2	20	0.400	
17	馬寮	善助	上	田	13	21	2.090	
18	馬寮	新兵衛	上	田	14	21	2.210	
19	馬寮	与惣兵衛	上	田	23	16	3.246	
20	馬寮	六右衛門	下	田	8	0	0.880	
21	川原畑	新兵衛	下	畑	20	15	1.865	
22	川原畑	久左衛門	下	畑	1	0	0.085	
23	車ノ地	山之内・甚左衛門	上	田	10	0	1.400	
24	車ノ地	山之内・甚左衛門	上	田	6	20	0.933	
25	車ノ地	西院村・権右衛門	中	田	12	0	1.440	
26	雀之森	新兵衛	下	田	4	0	0.440	
27	雀之森	中・八左衛門	下	畑	3	14	0.336	
28	大明神	善助	下	田	3	15	0.559	
29	常ヶ花	西院村・秀伝度	下	畑	0	10	0.400	
30	坪井	弥三治郎	上	田	4	12	0.616	
31	坪井	忠治郎	中	田	10	14	1.456	
32	坪井	弥三右衛門	下	田	5	23	0.796	堂屋敷の南
33	出口	選仏寺	下	畑	0	18	0.065	二条通南側御土居より東四ツ目
34	堂之うしろ	新助	上	畑	4	15	0.718	宮の前共
35	塔ノ本	忠治郎	下	田	12	0	1.320	
36	中御門	六右衛門	上	田	4	24	0.760	
37	中御門	六右衛門	上	田	10	0	1.500	
38	中御門	八左衛門	上	田	1	10	0.200	
39	西ノ町	六右衛門	中	畑	5	11	0.644	
40	西ノ町	善助	下	畑	4	12	0.408	
41	二条裏	伊兵衛	上	田	35	10	5.649	
42	二条裏	善助	上	田	14	12	2.302	
43	二条裏	善助	上	田	13	20	2.186	
44	二条裏	善助	上	田	12	0	1.920	
45	二条裏	新左衛門	中	田	1	10	0.257	
46	二条裏	六右衛門	下	田	10	0	1.000	
47	二条裏	忠治郎	下	田	24	0	2.420	
48	久ろ田	西院村・仁兵衛	下	田	4	20	0.560	
49	南平	半四郎	上	畑	4	6	0.630	
50	南平	忠治郎	下	畑	3	14	0.372	

資料 嘉永6年「御室御所領分田畑帳」（西京村文書）

15.734 石と全体の 26% になっている。嘉永 6 年の時点では仁和寺領は内野田・二条浦を中心に構成されていたということである。しかし、図 3 をみると、川原畑・車ノ地・雀之森・大明神・中御門・坪井・南平の支配地が確認できるのに対して、二条浦の仁和寺領は全く記載されていない。この二条浦の支配地については、養命坊（大報恩寺）領についても同じである。嘉永 6 年の養命坊水帳には二条浦支配地の記載が 1 件ある。しかし、田畑惣絵図の二条浦には養命坊を示す領主符号は一つも記載されていない。田畑惣絵図の二条浦は、幕府領の一区画、領主符号のない一区画を除けば、曼殊院領と等持院領で占められているのである（図 3、図 4）。

そこで、西京村において最も大きな支配高をもつ曼殊院（竹内宮）領について、同じ嘉永 6 年の状況を示したものが表 4 である。表 4 は嘉永 6 年「竹内宮御領所年貢取帳」²⁵⁾（以下、仁和寺年貢取帳）に記載された内容を字的地名ごとにまとめたものである。仁和寺年貢取帳には 143 件の記載があり、それぞれに耕作地の所在を示す字地名（一部、欠如）・名請人と取米高・寄銀高を記している。ただ、年貢帳は取米すなわち収納すべき年貢米高を記録したものであるため、耕作地の面積・地目・品等・斗代などは記載がない。表 4 によると、取米高では樋口・南平・坪井・西ノ町・森ヶ内・草畑などが大きな比重を占めている。これに対して、二条裏（二条浦）と明記しているのは 1 件だけで、その周辺に位置すると思われる「二条」を冠した字的地名を加えても、決して曼殊院領の中で比重が高い地域とは言えない。しかし、図 4 では、三条河原から二条浦に曼殊院領がまとまって分布している。逆に、図 4 では表 4 にあった坪井にほとんど曼殊院領がなく、内野田については一区画の記載もない。

以上の検討から明らかなように、田畑惣絵図の改めがあった安政 2 年（1855）と上記史料とはわずかに 2 年を隔てるだけであるが、田畑惣絵図に記載された領主符号の分布状況と嘉永 6 年の支配地の分布状況は大きく異なっている。このことは、江戸時代末期に西京村における領主別の支配地に大きな変化があった可能性を示している。

25) 「嘉永六年丑十一月 竹内宮御領所年貢取帳」（京都市歴史資料館所蔵、西京村文書マイクロフィルム紙焼資料）



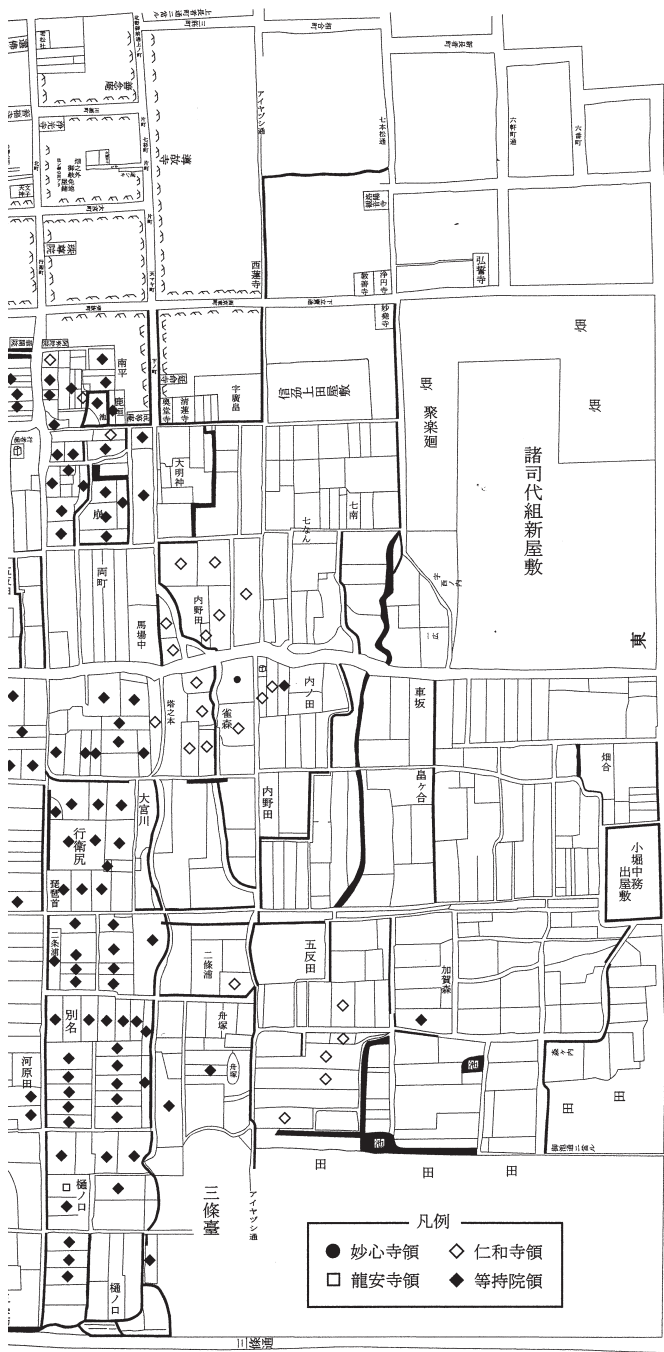


図3 近隣4か寺の支配地分布

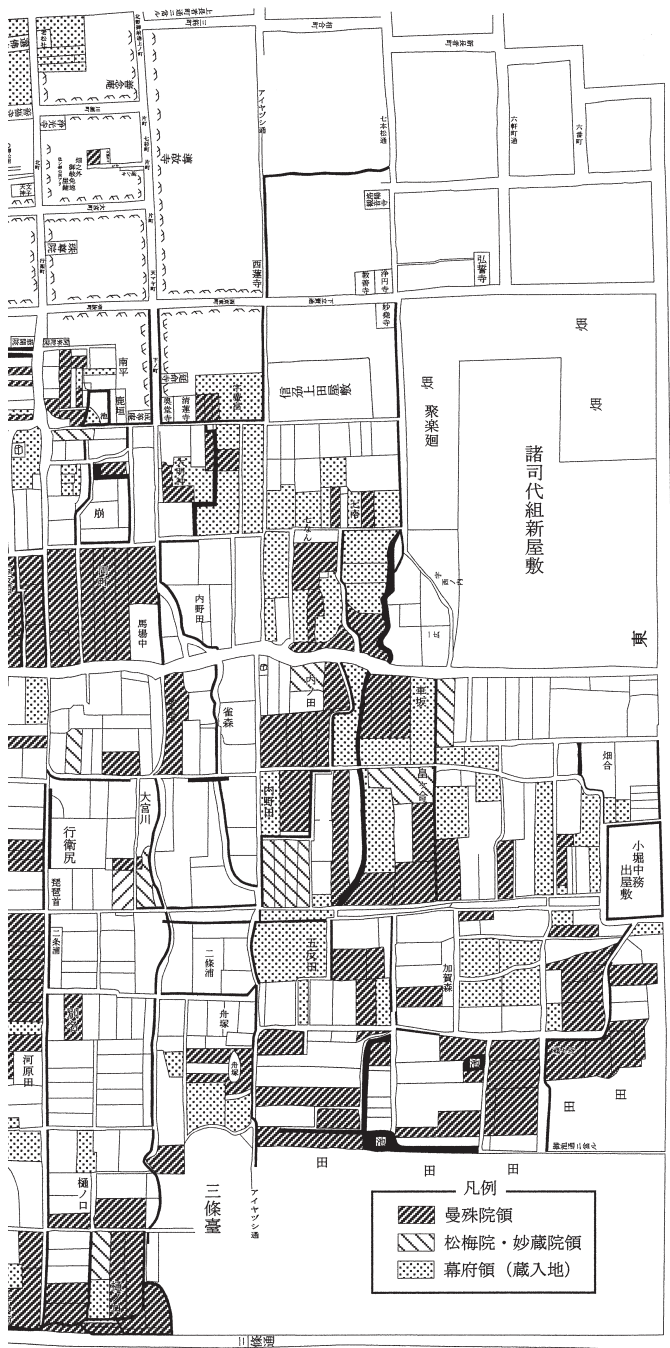


図4 西京村近隣寺院の支配地

表4 嘉永6年(1853) 曼殊院領の所在と取米高

字的地名	記載件数	取米高 石	字的地名	記載件数	取米高 石
阿弥陀ばか	3	4.02460	茶屋之前	2	0.77900
小堀池	6	3.57610	坪井	6	9.10020
内ノ田	1	0.28700	塔ノ本	1	1.59180
馬代	2	1.19242	殿ノ内	1	0.62100
馬之崎	1	2.68790	西ノ町	11	8.14796
うら畑	2	2.54950	二条浦	1	1.40200
円町	2	1.90600	二条下	3	1.40500
大畠(大畑)	5	4.06790	二条嶋	1	0.70000
御旅前	1	0.92340	二条土	1	1.82886
春日	1	0.91590	伯楽	1	0.31000
角明神	1	1.32600	畑	1	1.54020
行衛尻	2	2.08320	八反田	1	0.30743
草畑	5	6.84710	ハツ口	1	1.99040
車坂	2	1.30710	樋口	9	14.38299
合田	2	1.04060	ひよふたん	1	0.73100
五反田	4	3.10858	舟塚	2	5.30000
三条河原	3	2.08000	別名	1	0.92770
三条坊	3	1.73100	星池	3	5.07110
三ッ池	1	0.44200	南平	6	9.40718
鹿垣	1	4.89870	宮ノ前	1	1.08040
七南	2	0.85510	めめしゃこう	1	0.30900
嶋ノ内	1	5.93820	森ヶ内	9	7.04680
十二屋敷	6	5.38360	森ヶ宮	1	0.75810
宿紙	1	0.27530	両町	5	0.55360
大明神	3	2.70874	笑堂	2	0.46040
田中	1	1.78500	不詳	10	11.02870

資料 嘉永6年11月「竹内宮御領所年貢取帳」(西京村文書)

5. 名請人の記載時期

既述のように、筆者は領主別の支配地分布に関する情報(主題情報1)と区画単位の名請人(主題情報2)という二つを田畑惣絵図に主題情報とした。一舗の絵図に二つの主題情報が存在するという理解には矛盾があるようにみえる。しかし、墨書した名請人名を修正し、さらに名請人名のない区画に新たな名請人名を朱書で加え、名請人名を領主符号と同じようにほとんど絵図全体に記載していることを等閑視すること

はできない。

朱書に対して、墨書された名請人名は 159 か所と数が少ない (図 5)。しかも「忠・新・市・徳・甚」等の簡略な符号で記載されものが多数を占め、名請人の特定は困難である。その墨書と朱書の記載時期を考えるうえで手がかりとなるのが、寺院である。表 5 は嘉永 6 年 (1853)「竹内宮御領所年貢取帳」(以下、仁和寺領年貢取帳)に記載された名請人 54 名、安政 2 年 (1855)「竹内宮様高掛り」²⁶⁾ (以下、仁和寺領高掛り)に記載された名請人 77 名の名前と、田畑惣絵図に朱筆で記載され、読み取ることができた名請人 59 名を対照させたものである。これによると、曼殊院領の名請人として西王寺・清蓮寺・普明院・恵性院・安楽寺の 5 か寺が挙がっている。この 5 か寺のうち、田畑惣絵図には西王寺・清蓮寺が朱書で、普明院・恵照寺 (恵性院) が墨書で記載されている。しかし、安楽寺の記載はない²⁷⁾ (図 4)。『京都坊目誌』によれば、清蓮寺は下之町地尻付近にあった浄土宗寺院²⁸⁾で、安楽寺は北町西側にある一ノ保社²⁹⁾、西王寺は仲保町南側にあった臨済宗寺院である³⁰⁾。

普明院は幕府領の名請人としても絵図中に墨書され、また小堀主税御役所宛てに作成された天保 8 年 (1837)「酉年村方免割帳」³¹⁾にも普明院に関する記載があり、同史料には、この他に東光寺・選佛寺・成等庵・清蓮寺に関する記載もある (表 6)。「酉年村方免割帳」は冒頭で 5 頁にわたって小堀勝之助の署名と印をとまう「酉年御免定」の写しを載せ、次いで延べ 44 人の名請人とその石高・取米・銀高を列記している。列記の中から東光寺分までの冒頭部分、普明院、選佛寺以下の 3 か寺と末尾部分を示せば、以下のようにになっている。

高式拾四石貳斗七升壹合

一 取 十一石六斗九升六合

六兵衛

銀 百貳拾壹匁三分四厘

26) 「安政卯年十月 竹内宮様高掛り 壹石ニ付百六拾文ツヽ」(京都市歴史資料館所蔵、西京村文書マイクロフィルム紙焼資料)

27) 年貢取帳・高掛りともに安楽寺に関する記載は一件で、前者では 7 斗 7 升 3 合 6 夕の生産高、後者では 1 石 1 斗の生産高に対して年貢を請け負っていることがわかるが、両史料には字的地名に記載がなくその耕作地の所在は不明である。

28) 前掲 18), pp299.

29) 前掲 18), pp302-303.

30) 前掲 18), pp312-313.

31) 「天保八年酉十二月 酉年村方免割帳」(京都市歴史資料館所蔵、西京村文書マイクロフィルム紙焼資料)



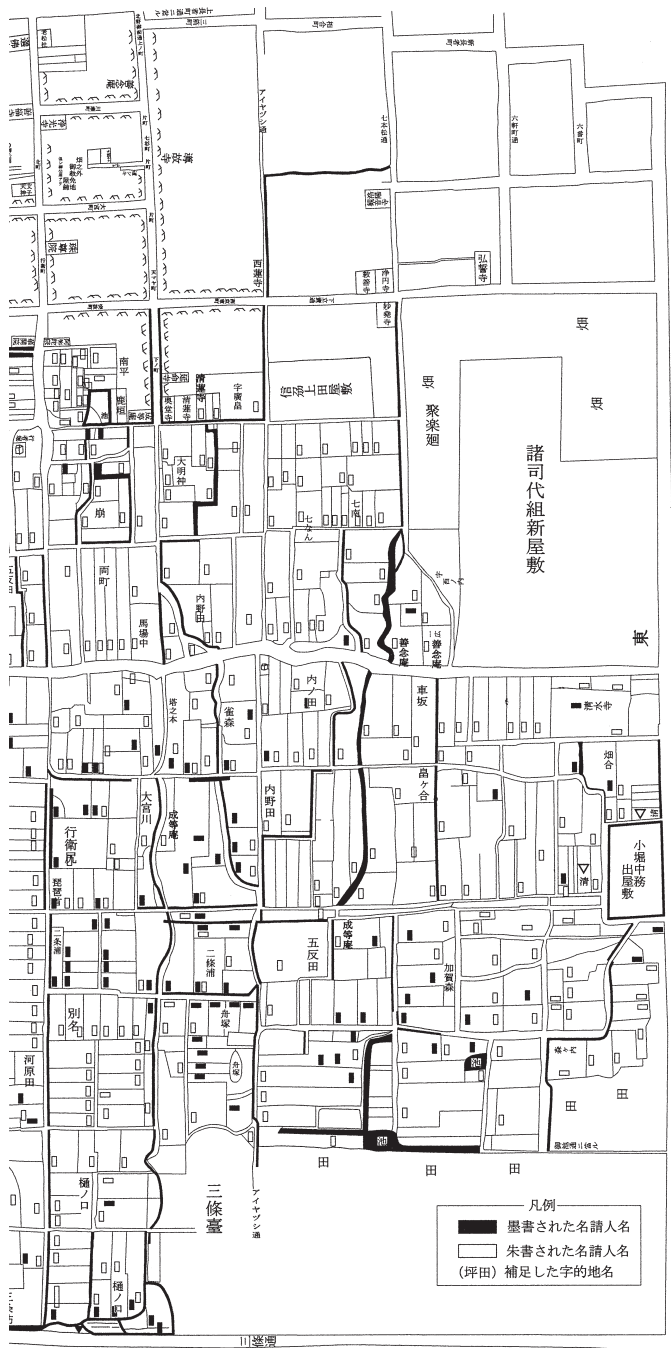


図5 田畑惣絵図における名請人の記載位置

表5 江戸時代末期の曼殊院（竹内宮）領の名請人

「御領所年貢取帳」		「竹内宮様高掛り」		「西京邑田畑惣絵図」	
嘉永6年（1853）		安政2年（1855）		安政2年（1855）改	
符号	名請人名	符号	名請人名	符号	名請人名
	弥三右衛門	中	弥三右衛門		弥三右衛門
	七兵衛		七兵衛	中	七兵衛
中	弥兵衛	中	弥兵衛		—
	西王寺		西王寺		西王寺
中	善兵衛		善兵衛	中	善
	太兵衛		太兵衛		太兵衛
	喜兵衛	中	喜兵衛	中	喜
	喜八	堀川町	喜八		喜八
	—	東町	喜八	東	喜八
堀	市兵衛		—		—
	市兵衛		市兵衛		—
	安楽寺		安楽寺		—
大宮町	治兵衛	大宮町	治兵衛	大	治
大	新太郎		新太郎		新太郎
片	茂兵衛	片	茂兵衛		—
上	長右衛門	上	長右衛門		—
	新左衛門		新左衛門	下	新左衛門
	利兵衛	妙	利兵衛	妙	利兵衛
北	利兵衛	北	利兵衛		—
	已之助		已之助		—
	新兵衛	下	新兵衛	下	新兵衛
川	新兵衛	川	新兵衛		—
下	伊兵衛	下	伊兵衛	下	伊
花	伊兵衛		—	花	伊
	—	中	伊兵衛	中	伊
	—	長源八	伊兵衛		—
下	半四郎	下	半四郎	下	半四郎
	—	中	半四郎	中	半四郎
下	弥三郎		弥三郎		弥三郎
突	弥兵衛	突	弥兵衛	突	弥
	忠次郎		忠次郎		忠次郎
行	源兵衛	行	源兵衛	行	源
大	源兵衛	大	源兵衛		—
	安次郎		安次郎	行	安
行	仁兵衛		—	行	仁兵衛
	—	南	仁兵衛		—
	—	新	仁兵衛		—
	清八		清八		清八
	佐兵衛		佐平		—
	半次郎		—		—
	貞之助		貞之助		貞之助
	才治郎		才次郎		—
	太左衛門	山	太左衛門		—

「御領所年貢取帳」		「竹内宮様高掛り」		「西京邑田畑惣絵図」	
嘉永6年（1853）		安政2年（1855）		安政2年（1855）改	
符号	名請人名	符号	名請人名	符号	名請人名
山	平兵衛		—		—
	文左衛門		文左衛門		—
	重次郎		重次郎		—
妙	七郎兵衛		—		—
	—	山	七郎兵衛		—
	清右衛門		清右衛門		清右衛門
	普明院		普明院		普明院
	恵性院		恵性院		恵照寺
	善吉		善吉		善吉
	久右衛門		久右衛門		久右衛門
	市郎兵衛		市郎兵衛		—
	長蔵		長蔵		—
	重兵衛		重兵衛		—
	九左衛門		九左衛門		九左衛門
瓦師	治兵衛		—		—
	—	瓦師	伊右衛門	瓦師	—
	新助		新助		新助
	八左衛門		八左衛門		八左衛門
	源次郎		源次郎		源次郎
			小四郎		小四郎
			小兵衛	山	小兵衛
		西院	権右衛門	西院村	
			万次郎		万治郎
		下	善助	下	善助
			庄兵衛		富庄
			藤左衛門		藤左衛門
			長左衛門		長左衛門
			又兵衛		又兵衛
			弥三次郎		弥三次郎
			与三兵衛		与三兵衛
			太三郎	山	太三郎
		中	吉兵衛	中	吉
			清蓮寺		清蓮寺
			定吉		長五郎
			九右衛門		坪田
			宇兵衛		已太郎
			衆吉		善六
			佐左衛門		川勝
			六兵衛		朱蔵
			甚兵衛	西町	仁兵衛
				突	伝兵衛

資料 西京村文書・嘉永6年丑11月「竹内宮御領所年貢取帳」

西京村文書・安政2年卯10月「竹内宮様高掛り」

表6 天保8年における幕府領の名請人

名請人		高	取米	寄銀
		石	石	匁
六兵衛		24.271	6.696	121.36
庄兵衛		19.479	7.224	97.40
七兵衛		3.059	1.166	15.30
伊兵衛		2.947	1.056	14.74
利兵衛	講田	0.930	0.084	4.65
仲・七蔵		1.417	0.496	7.09
太左衛門	志津分	0.666	0.300	3.33
甚五郎		0.828	0.227	4.14
源次郎	社中分	5.432	1.930	27.17
八左衛門		9.035	3.514	45.18
新助		9.249	3.406	46.25
甚之助		2.905	0.313	9.64
甚兵衛		4.099	1.109	20.50
新左衛門	講田	1.610	0.502	8.05
六右衛門		3.687	1.013	18.44
清兵衛		3.214	0.813	16.07
仁兵衛		0.154	0.069	0.77
与三兵衛		5.996	2.489	29.98
七郎兵衛	五郎助分	2.056	0.308	10.28
吉兵衛		3.640	1.431	18.20
藤左衛門		23.871	6.387	105.70
藤次郎		6.794	1.183	33.97
嘉兵衛		5.621	1.750	28.11
弥三郎		17.643	5.622	84.85
新兵衛		1.892	0.662	9.46
善兵衛		2.738	0.457	13.65
太左衛門		8.840	3.700	44.20
惣八		1.452	0.523	7.26
北町・七兵衛		0.525	0.293	2.63
大將軍・源兵衛		10.305	7.214	51.53
瀬次郎		12.024	3.994	60.12
藤三郎		24.694	9.426	123.47
長右衛門		1.545	0.033	7.23
安次郎		1.130	0.374	5.65
忠次郎		39.173	13.075	195.87
七郎兵衛		3.251	0.325	16.26
利兵衛	普明院分	4.870	2.377	24.35
源次郎	東光寺分	3.040	1.064	15.20
成等庵		0.900	0.630	4.50
成等庵		0.351	0.158	1.77
清蓮寺		0.165	0.132	0.83
選佛寺		1.050	0.840	5.25
■左衛門		10.249	2.835	51.21
■左衛門	出作分	62.310	28.784	237.73

資料 天保8年12月「酉年村方免割帳」(西京村文書)

注) ■は判読不能の文字を示す。

高拾九石四斗七升九合

一 取 七石貳斗貳升四合

庄兵衛

銀 九拾七匁四分

高三石五升九合

一 取 壹石壹斗六升六合

七兵衛

銀 拾五匁三分

高貳石九斗壹升七合

一 取 壹石五升六合

伊兵衛

銀 拾四匁七分四厘

高三石四升

東光寺分

一 取 壹石六升四合

源七郎

銀 拾五匁貳分

(中略)

高四石八斗七升

普明院分

一 取 貳石三斗七升七合

利兵衛

銀 貳拾四匁三分五厘

(中略)

高壹石五升

一 取 八斗四升

選佛寺

銀五匁貳分五厘

高九斗

一 取 六斗三升

成等院

銀 四匁五分

高壹斗六升五合

一 取 壹斗三升貳合

青蓮寺

銀 八分五厘

(中略)

米 百貳拾五石九斗八升四合

内

但

九拾石四斗五升八合

米納九拾貳石三斗三升八合

内 壺石八斗八升 室井■

残米三拾五石五斗貳升六合村方拂 壺石ニ付九拾八匁

代銀三貫四百八拾壺匁五分五厘

寄銀壺貫六百四拾九匁三分四厘

合銀五貫百三拾目八分九厘

東光寺分 3 石 4 升に対して名請人源七郎に 1 石 6 升 4 合・銀 15 匁 2 分の、普明院分 4 石 8 斗 7 升に対して名請人利兵衛に 2 石 3 斗 7 升 7 合・銀 24 匁 3 分 5 厘の免割が行われ、選佛寺以下の寺院も領有している幕府領の土地の生産高に応じて相応の年貢負担をしていたことがこの史料からわかる。さらに、明治 3 年（1870）「御料御年貢取立帳」³²⁾には東光寺分・成等庵分、清蓮寺・選佛寺のほか西王寺が記載されているが、普明院は挙がっていない。以下は、「御料御年貢取立帳」の冒頭部分から東光寺分まで、およびの成等庵以下 4 か寺に関する記述である。

御料御年貢米之事

壺石ニ付金八両替

金掛り高壺石ニ付

金壺朱集メ

一金（割印） 六拾三両壺朱
七百廿八文

六兵衛

下ノ

一々（割印） 六拾貳両貳朱
七拾六文

伊兵衛

一々 七両貳分 （割印）
三百七拾四文

坪井

山ノ内

一金（割印） 金貳分

卯兵衛

32) 「明治三年庚午十二月 御料御年貢取立帳」（京都市歴史資料館所蔵，西京村文書マイクロフィルム紙焼資料）

貳百七拾文

東光寺分

一ヶ（割印） 拾壹両貳朱

新助

百拾貳文

(以下, 27 件を省略)

成等庵分

一ヶ（割印） 五両壹朱

村持

四百五文

一金（割印） 貳拾九両三步

太左衛門

壹朱

三百十貳文

一ヶ（割印） 壹両貳歩三朱

西王寺

貳百三拾貳文

(以下, 8 件を省略)

貳歩

一金（割印） 六両 三朱

迂佛寺

七拾七文

山之内

一ヶ（割印） 拾壹両三部三朱

惣右衛門

七百卅貳文

一ヶ（割印） 壹両一朱

清蓮寺

四拾六文

(以下, 省略)

東光寺分の年貢を請け負っている新助が納める 11 両 2 朱は、1 石 8 両替で換算するとおよそ 1 石 3 斗 9 升 1 合に相当する。先に挙げた天保 8 年の取米 1 石 6 升 4 合に比べ、明治 3 年時点の年貢は大幅に増加している。しかし、東光寺分の記載は「酉年村方免割帳」・「御料御年貢取立帳」ともに 1 件ずつであることから、同じ土地を記載したものと考えられる。また、成等庵分・清蓮寺・迂佛寺についても同様に計算する

と、明治3年の成等庵分は6斗3升3合、選佛寺は8斗3升6合、清蓮寺は1斗3升3合の年貢負担となる。これらは天保8年の取米高（表6）の近似値であり、成等庵・選佛寺・清蓮寺とも、東光寺分と同じように、同じ土地を天保8年から明治3年まで領有し続けたことがわかる。しかし、田畑惣絵図の幕府領に記載されているのは東光寺分および普明院だけで、清蓮寺の一区画には「万」、選佛寺の一区画には「ホ」（等持院領）、成等庵の二区画には「南」（南禅寺領）と記載されている。以上から明らかになることは、二点である。一つ目は、寺院所有地を通して、領主の変化があったことが確認できること、二つ目は文政6年（1823）から天保8年（1837）の間に幕府領の土地を所有した普明院・東光寺・選佛寺・成等庵・清蓮寺の中で、一貫して幕府領の土地を所有していた普明院・東光寺が墨書され、ある時期に所有した土地が幕府領から他領に支配が変わった選佛寺・成等庵・清蓮寺が朱書されているということである。名請人の墨書・朱書の違いには西京村内における領主の支配地の移動が背景としてあったのである。

支配地の移動にともなって名請人の朱書が行われた時期については、表5が手がかりを与えてくれる。田畑惣絵図では曼殊院領の一部に名請人が記載されていないため、表5と完全なかたちで対照させることはできないが、58名中49名の名請人を安政2年の仁和寺領高掛りで確認できる。もちろんそれらの多くは仁和寺領年貢取帳にも記載されている。しかし、東・喜八、妙・利兵衛、中・伊兵衛、中・半四郎と、小四郎から清蓮寺までを合わせた18名は安政2年になって新たに記載された名請人である。一方で、田畑惣絵図には仁和寺領年貢帳にあって高掛りにはない若干名の名が記載され、表2の長五郎以下9人のように、仁和寺領年貢取帳や仁和寺領高掛りにはない名請人も記載されている。前者で確認できたのは喜八・花伊（花・伊兵衛）・行仁（行・仁兵衛）の三名で、いずれも朱筆で記載されている。仁和寺領年貢取帳によると、このうちの花・伊兵衛は字・殿ノ内の耕作地に墨書された下・庄兵衛の訂正として記載されたものである。仁和寺領高掛りには庄兵衛の名があるが、それが下・庄兵衛であるとは断定できない。しかし、中・弥三右衛門が仁和寺領高掛りでは弥三右衛門とだけ記載されている例もあり、庄兵衛と下・庄兵衛が同一人である可能性は否定できない。さらに、後者のうち「坪田・川勝」は明治3年（1870）「御料御年貢取立帳」に幕府領の名請人としても名が挙がっており、江戸時代末期から明治初期にかけての農民であったと思われる。こうした点から、朱筆は安政2年というより、安政2年後に記載されたと理解するほうが妥当である。

以上の検討によって、名請人名が墨書・朱書でかき分けられた背景と名請人を朱書

した時期が明らかになった。ここから、名請人を墨書した時期が安政2年以前であることは明らかであり、朱筆による修正が行われていたことにより、名請人を墨書した絵図が既に存在していたことが推定される。また、それは先に課題として残した領主別支配高や領主符号が記載された絵図が安政2年以前に存在していたことを示唆している。ただ、安政2年における曼殊院領の名請人は確認できるが、耕作地の位置については史料を欠き、不明である。そのため、田畑惣絵図に記載された領主別支配地の分布が安政2年の状況を示すとは言い切れない。しかし、安政2年直後の時期と思われる朱筆による修正・追記が「改」の内容とは考えにくいこと、名請人の墨書と朱書が支配地の移動を背景にして書き分けられていることから、現時点では田畑惣絵図は「安政二改」という記載から安政2年に支配地の移動があり、新たな支配地の分布を記載したものと考えておく。

6. 「西京邑田畑惣絵図」からみた西京村の特性

本稿では絵図の記載情報の時間的重層性という点に注意を向け、田畑惣絵図を地域基本情報、主題情報に分け、その内容に基づきながらそれらの記載時期の検討を進めてきた。史的に裏付けながらそれぞれの記載時期を明確に特定できたとは言い難い部分もあるが、伝存する田畑惣絵図の作成、情報追記の過程は以下のようにまとめることができる。

当該絵図の地域基本情報は享和3年(1803)から文政5年(1822)の間の絵図を書写したものに、天保年間(1830～1844)前半と推定される時期に二ノ保社の削除や殊尊院の追加といった修正が行われた。最初の書写の時期、そして地域基本情報の修正の時期は特定できないが、この二つの異なる時期の情報が混在している。したがって、書写した絵図をそのまま利用し、修正を加えた可能性が高い。また、記載時期は特定できないが、領主別支配高・領主符号・墨書した名請人を当該絵図に記載し、安政2年(1855)直後の時期に書き込まれていた墨書の名請人名を一部で書き換え、朱書によって見性庵と推定されるものを含めて二字の建物と多数の名請人の追加が行われた。

以上の検討を通して、西京村について明らかになったことは、西京村内において複数の領主の支配地に場所的な移動が起きていたことである。本稿で支配地の移動を確認したのは仁和寺領・養命坊領と曼殊院領でしかないが、公的な領主別支配高には変化が認められないため、各領主の支配地の移動は西京村内で完結したと考えられる。

したがって、仁和寺領・曼殊院領などの移動は他の領主の支配地の移動をともなうものであったはずである。こうした西京村内における支配地の移動は安政2年のことだけではない。記載数は少ないものの、絵図中に記載された墨書の名請人名も支配地の移動に合わせて記載された可能性があり、また村内の寺院が所有する土地の支配が安政2年と明治初年とでは異なっていた。このことは、19世紀に少なくとも複数回の支配地の移動が起きていたことをうかがわせている。

近世領主による土地の領有について、水本邦彦は近江国野洲郡安治村の相給耕地絵図を例にして「領有権は、その分散状態から見て実際の農業生産活動のまとまりを反映したものとは考えられず、観念的・抽象的なものであったと想定される」³³⁾と指摘している。また、河原伸治も近世山城国南部の相給村の支配に関して幕府領や仙洞領など4領主の相給村であった南山城地方の寺田集落を例に同様の指摘を行い³⁴⁾、荒木仁朗は一村が智積院領であった山城国宇治郡大鳳寺村でも間接統治であったと報告している³⁵⁾。このような近世京都周辺における相給村あるいは寺社領の支配に関する研究成果を参照すると、西京村もその例外ではなかったと考えることは可能である。19世紀前期から中期にかけてのおよそ50年の間に複数回の支配地の移動が可能であったこと、田畑総絵図において支配地の移動がほぼ全村的な規模で把握されていたこと、この二点は相給村や京都近郊の寺社領という上述のような支配の実態を反映したものであるとみることができるからである。

しかし、それによって田畑惣絵図に記載されていた事柄を十分に理解することができであろうか。確かに、領主別支配地の分布と各区画に記載された名請人を別の事柄と理解すれば、そのような理解も成り立つであろう。しかし、そうした理解では田畑惣絵図に名請人の記載がない区画があったり、記載されていても部分的であったりする理由までは説明できない。田畑惣絵図の検討から考える限りでは、名請人の墨書・

33) 水本邦彦(2002)『絵図と景観の近世』、校倉書房、pp239-241.

34) 河原伸治(1999)「南山城寺田集落の空間構造に関する歴史的研究」、日本建築学会計画系論文集第515号、pp29-296。河原は寺田集落を対象とした考察に安政4年(1857)「寺田村田畑地並高反別仕訳帳」とその付属図を使用している。仕訳帳には5083筆分の記載があり、それぞれに各土地の番号・字・領主・土地保有者・耕地の品等・反別・石高が記載されている。河原によると、仕訳帳に記載された幕府領は延宝7年(1679)頃、仙洞料・女院領・新女院領は天正年間の土地状況であるという。河原の関心が集落構造の歴史の変遷にあったためか、本文中には耕作地についての言及はなく、また安政4年の年紀がある仕訳帳になぜ16世紀末から17世紀にかけての土地状況が記載されていたのか、記載内容と安政4年の状況に異同があったのかといった点についても触れていない。

35) 荒木仁朗(2012)「智積院朱印地大鳳村をめぐる一畿内近国を中心とした近世寺社領と寺社支配の論点一」、智山学報第61輯(通巻75号)、pp293-299.

朱書の区別は支配地の移動を背景としている。領主別支配地の分布と各区画に記載された名請人が密接に関係しあっていたとすれば、西京村の領主別土地支配については「観念的・抽象的」とは異なった理解が成り立つ余地が残されているように思われる。

7. おわりに

本稿では「西京邑田畑惣絵図」の分析を進めてきたが、最終的には複数の寺社・公家を領主とする近世京都近郊村落の支配地の存在形態にまで言及することになった。相給村における支配地の存在形態は歴史地理学の領域を超える問題であり、筆者は先学の研究成果に学ぶはかない。しかし、実態を備えたものかどうかは別にして、田畑惣絵図の分析を進める過程で、西京村内において複数の領主の支配地の場所的な移動が50年間に複数回起きていたことを確認した。そして、それが安政2年における田畑惣絵図の「改」の契機になっていたと考えられることを指摘した。

その一方で、本稿には残された課題も多い。安政2年の時点における領主別支配地の分布状況が確認できていないこと、また墨書された名請人名が、いつ、どのような必要があって朱書以前に記載されていたのかという点について、史料で裏付けたうえで明確にできなかったこと、さらに絵図に記載された情報の時間的重層性に焦点をあてて分析を進めたが、記載時期を十分に特定できなかったこと、等々である。これらの点については、あらためて別の機会に（再）検討することにしたい。

（ワタナベ ヒデカズ 兼担研究員）

